

定義存在学

数学文法認知哲学と数学的理想主義の記法定義

Shinichi Yoshimi

Independent Researcher, Okinawa, Japan

Email: akbfp443@me.com

ORCID: 0009-0008-8121-8947

Dec 01, 2025

アブストラクト (abstract)

This paper is one of the three works that together form a coherent series:

No.1: *Mathematical Grammar and Cognitive Philosophy*

No.2: *Mathematical Idealism*

No.3: *Definition Ontology*

Each of these three papers can be treated independently as a work belonging to its own domain, yet they may also be read collectively as a unified study. The shared inquiry running through them is: *What is philosophy?* *What is mathematics?* *What is physics?* *What is language?* Because these works are fundamentally studies—and discoveries—of recognition and consciousness, using the English language would contradict the very proofs they aim to establish. Therefore, these works are not written in English.

To read them, one must either learn Japanese, or rely on an English outline as an approximation. But even this requirement becomes part of the dynamical

theme explored in Definition Ontology.

Why these three papers are not written in English is explained in another work, *Objects Do Not Exist — Proof of “Pen is this”*. This may be positioned as No.0 preceding the trilogy.

Including No.0, the set becomes a tetralogy. Yet fundamentally, all of these writings exist to explain a single axiom:

$$\sqrt{1} = 0.$$

Most of my work could be unified into one comprehensive paper explaining this axiom. However, doing so would prevent the reader from attaining objective recognition. Therefore, I intentionally present each work in a simple, single-proposition form.

Accordingly, I ask the reader to approach this paper with sincerity. Do not focus on where citations appear or what each phrase “should mean.” Instead, feel the text as it is.

For simplicity maximizes objective recognition.

Mathematics, physics, and philosophy have long been blinded by Cantor. Infinity is an objective definition; what Cantor accomplished was the infinitization of objective recognition.

To appreciate the depth of Cantor’s deviation, one must understand this:

Simplicity does not make flavor shallow. A flavor becomes profound not because the flavor itself is complex, but because the manner of savoring is complex.

The reason savoring becomes complex is not that the flavor is divided into complex classifications— Rather, most scholars fall into the fatal error of trying to discover “their own flavor.” The flavor was never complex. Only the way of savoring was complex.

In truth, the flavor is simple.

I write this passage in English deliberately, as a gesture of respect toward the English language, which has supported modern scholarship.

However, English cannot generate words infinitely. *Flower* is both wheat and blossom. The reason for this is not Old English derivation; it is a matter of how recognition is savored.

What modern scholarship suffers from is the functional limitation of the English language. And I wish to believe that the fundamental human sensibility is shared by all. What differs is merely the manner in which that sensibility is savored.

Why such differences arise is precisely what Definition Ontology reveals: Between existence and existence, a dynamical structure of **JIKAN (time)** emerges; and the deviation of **JIKAN (time)** becomes the deviation of recognition.

Evolution, dialects, languages, ethnicities— Everything human is built upon accumulated deviations, a deviation of deviations of deviations, endlessly layered.

First, I ask you to feel the deviation between English and Japanese.

定義存在学を説明する前に以下の文章を読んでもらいたい。

「風も光も存在しない」「我々は“そう呼んでいる”」

この文章を誤解なく読むことができるだろうか？

これを哲学と呼ぶなら物理学に未来はないと言い切れる。

まず、物理学の定義をしなければならない。

物理学とは、風の力を数量化・光の速度を数量化など、その他にも、あらゆるエネルギーと言う抽象的な感覚（哲学）を1つずつ数量化して記述し、人間の認知範囲における現象を記憶として補完する行為である。

つまり、物理学は【人間の集合知の記憶】と記述することができる。

逆に言えば、未来を測定しているようで、未来は測定できない事を証明する行為でもある。

筆者は物理学や、あらゆる学問に対して否定的ではなく、偉大な先人たちの叡智の結晶であり、先人の叡智がなければ、『風も光も存在しない』などとは記述しないだろう。

では、本論文での物理学の定義をする。

物理学とは『エネルギーと言う抽象的な定義を基軸にした学問である。』

エネルギーがなぜ抽象的なのか？

風が吹くのは温度差があるからであり、風力をエネルギーと抽象化する事にある。

もっと細分化すると温度と言うのは存在と存在の時間のズレからであり、温度をエネルギーと抽象化する事で数量化を試みている。

何故、温度があるのか？

何故、時間がたつと温度は一定になるのか？

それは存在と存在の時間のズレを温度として抽象化している。

(抽象化すると言うのは、『温度』具現化する行為ともとれるが、この場合の抽象化と

は存在と存在の時間のズレと言うのをどのように人間が感じるかという事を抽象的に捉えないと温度と言う具象化が生まれないからである。)

この表現は非常に誤解を生む表現だが、風を感じると言うのはそもそもその原因は温度変化なのだが、その根本的な状態を具体性を持って突き詰めていくと温度変化が問題ではなくて、存在と存在の間による時間が発生している事が原因になっている。

つまり、抽象的記述が個人（個存在）の感覚であり、具象的記述が人間（集合存在）の感覚となるからである。

しかし、物理学ではこれが逆転する。

人間（集合存在）が風を感じる（感覚）のは、具象的記述が原因であると定義するからである。

個人（個存在）の感覚は抽象的記述であるため、物理学としてはズレが記述されることになる。

個人（個存在）の再現性を人間（集合存在）で記述する際には、人間（集合存在）を個存在として定義しなければ再現性は得られないである。

なぜならば、集合存在は個存在として同一ではない。

であるならば同一的感覚を記述するためには集合存在を個存在と定義する力学が記述される。

この原理が物理学であり、同一化と集合のズレによる記述なのである。

例えば月と地球の意識について記述してみよう。

月は地球を感じ、地球は月を感じている。

だから地球は月とぶつからない。

だから月は地球の周りを回っている。

地球が月を同一ではないと定義しているし月が地球を同一ではないと定義している。

地球も月も意識と認識と記述をしている事になる。

しかし、地球も月も集合体であると個存在として定義をしている。

コレらは全ての存在においての力学である。

存在の同一化が定義と結果による力学を記述して存在を生成しているように定義している。

この全ての存在による同一化の定義こそが時間となる。

よって時間の総量を 1 または 0 と記述する事ができる。

なぜなら、0 は集合であり、1 は同一性である。

この記述のズレが力学となる基準を定義存在学と名付ける。

定義存在学では物理学で量化されているエネルギーの抽象概念を一つにまとめることができる。

つまり、物理的に現象化された認識のズレを時間として量化する計算を定義圧と名付ける。

定義圧は時間であるため英語で記述される TIME とは同一化できない。

何故なら TIME は人間の定義に内包されている定義であるため存在の集合における力学では差が生まれるため同一化の保存では計算できない。

時間は日本語で記述される言語であり本論文では英語で TIME と訳す事も出来る。

しかし、本論文では日本語の数学的集合を利用し時間を JIKAN と定義し記述する。

それでは風の簡易思考実験をすると、扇風機はどうなるという科学者がいるだろう。

扇風機とは温度差から生まれる風と定義された現象を再現した記述である。温度性を重力性に変換した記述となる。

つまり、これが物理学であり、物理学の限界でもある。

何故なら風の再現に温度性を無視し重力性のみを記述している。
温度とは重力とは何かを哲学的に計算し記述していない。

つまり、定義存在学とはエネルギーの抽象化による再現性の担保こそが物理学の最大の利点なのである。

1 序論

定義存在学とは時間を代数と定義して存在の固有の時間量を比べ再現性を記述する学問である。

時間は定数ではない、JIKAN は代数である。と言う命題を説明するにあたり、つまり JIKAN とは定数を代数とする定義である。

定義とは解である。解とは定義である。

本論文は、存在が定義行為そのものから生成するという立場に基づき、「定義存在学」の理論を提示する。

ここで存在は、現象化された状態ではなく、定義の同一化である。

存在はその保存によって集合化し「定義圧（圧 = Atsu）」の密度によって量化し記述される。この圧が存在の空間の集合化を記述しづれを内包する。

定義圧の圧とは、密度のズレによる力学的量化を圧と記述する。

定義 = 解 \in 記法(N)

ここで「定義」は同時に『基準』であり、『結果』でもあり『存在』となる。

したがって宇宙とは定義であり風や光の記述と相似である。

本研究はシンイチ数学（Shinichi Mathematics）の基礎理論を形而上学へ拡張し、定義存在学の最終的統一は「真理」ではなく、再現量の数値化の記述、基準と解の同一性のズレの保存を計算し続ける記述である。

2 命題

基準が結果を生成し結果が基準を生成する。

生成された存在は必ずズレている。

存在が存在を定義するため。

存在は定義でもある。

定義は時間として記述されるため、時間は定義でもある。

しかし、時間は主体的には存在しないし、定義された時間も主体的に存在しない。

定義（記法）

- 基準：0 もしくは、0 に変わる物。
- 結果：0 が変化した存在。
- 同一化：相似体系とズレ体系の力学を 0 と記述化する定義・0。

- **0** : 同一性のない数字。
 - **1** : 0 以外の全てを記述できる数字。
-
- 存在 : 定義された物。
 - 定義 : JIKAN の差。
 - **JIKAN** (ジカン) : 力学を記述した数字。
-
- 数字 : 記号に計算を定義した存在。
 - 言語 : 記号に認識を定義した存在。
 - 計算 : 意識・定義。
 - 無限 : 計算の記述。
 - 同一 : ズレを内包しているが記述されていない状態。
 - ズレ : 体系の相似。
 - 差 : 体の方向のズレ。
 - 内包 : 差が記述されていない状態。
 - 解 : 記号と同一。
-
- 定義 **JIKAN** : 基準と結果の力学。
 - 存在 **JIKAN** : 存在を基準にした時の力学。
 - 基準 **JIKAN** : 0 もしくは 1 で表わされる総体的な JIKAN の力学。

- **TIME** : 12 進法による人間による定義。(存在 JIKAN の相似)。
- 時間 : TIME の日本語訳・定義存在学の力学的記述。(本論文では同一性を記述しない状態の記述には、日本語の主体による客観の変化を利用して記述する。)
- 力学 : 定義による密度差。
- 記述 : 基準からの力学による記号。
- 意識 : 基準の定義。
- 認識 : 結果の定義。
- 抽象 : 認識の集合的感覺。
- 具象 : 認識の同一的感覺。
- 概念 : 意識の集合。
- 感覚 : 存在が記述した相似的存在。
- 数学 : 計算を利用した定義手法。
- 哲学 : 意識を利用した定義手法。
- 物理 : 認識を利用した定義手法。
- 会話 : 定義を利用した定義手法。
- シンイチ数学 : 存在を利用した定義手法。
- 日本語 : 主体を客観的に主観にする。
- 英語 : 主体を主観的に客観にする。
- 言語としての数学 : 主観的に客観し主体を記述する。

- 主体：基準。
 - 主観：存在が基準となる。
 - 客観：定義が基準となる。
 - 個：固有の存在化。
 - 固有：存在の集合体系・存在が主体として客観的に記述する力学を有する状態。
 - 状態：存在が認識し記述できる集合体系。
 - 現象：主観的な状態と客観的な状態の同一性。
 - 再現：現象の状態化。
 - 原因：定義に対する答え。
 - 原理：力学の記述。
-
- ○○体系：集合の状態。
 - ○○体：集合の存在。
 - ○○的：基準の相似。
 - ○○性：集合の相似。
 - ○○化：同一性の相似。
-
- 公理：基準。
 - 同一性：存在が基準になる。
 - 集合：定義が基準になる。
 - 相似：集合の定義力学。
 - 保存：同一化の相似性の内包的記述。

- 回転：基準・集合・同一性を内包した力学の記述。
 - 圧：回転の相似の記述。
 - 方向：回転の同一性の記述。
 - 波：回転の集合の記述。
 - 密度：定義と結果の力学の記述。
 - 量：定義による力学による数字的記述。
 - 総量：量の密度の基準。
-
- 生命：回転を集合としない方向の記述。
 - 物質：回転を集合としない波の記述。
 - 時間：回転の集合の記述。
 - 空間：回転の集合の存在。
 - 宇宙：空間の力学の記述。

3 結論

記法が定義であり基準であり存在と記述される。

筆者が書いた論文（記述）の定義は記述である。

この論文を同一化の原理の記述は方向を記述するため、論文と相似体を記述できない。

したがって、集合性を個存在の原理と記述し保存する主体の総量と定義する。

よって別論文の数学的 idealism と数学文法認知哲学の集合的概念の総量となると筆者が定義する。

つまり、定義存在学を主体とし客観を定義し主観を解とする。

$$\text{定義} = \text{解} \in \text{記法}(N)$$

付録 (Appendix)

1. 名もなき君へ

君の名は何であるか。それが君の証である。

参考文献

- [1] Yoshimi, Shinichi. *Shinichi Mathematics: A Symbolic Foundation Based on $\sqrt{1} = 0$* . Zenodo, 2025.

DOI: [10.5281/zenodo.15533064](https://doi.org/10.5281/zenodo.15533064)

- [2] Yoshimi, Shinichi. *The Shinichi Transformation*. Zenodo, 2025.

DOI: 10.5281/zenodo.15525952

[3] Yoshimi, Shinichi. *The Proposition Refutation Theorem*. Zenodo, 2025.

DOI: 10.5281/zenodo.15761091

License

This work is distributed under the Shinichi Mathematics License v1.0.

© Shinichi Mathematics Project.

License URL: <https://doi.org/10.5281/zenodo.15386802>